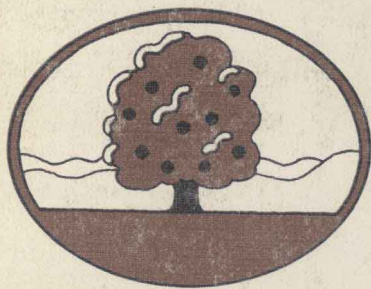
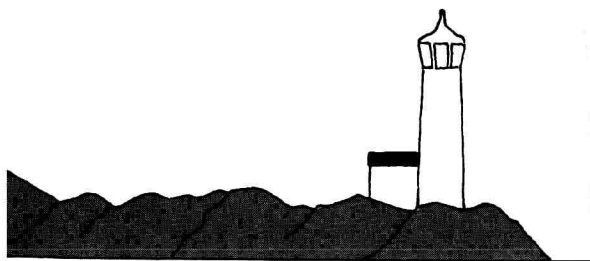


北杜夫全集——6



酔いどれ船
黄いろい船

北杜夫全集—6



新潮社版

酔いどれ船・黄いろい船



〈北杜夫全集 6〉

一九七七年六月二〇日 印刷
一九七七年六月二五日 発行

定価一〇〇〇円

著者 北 杜 夫
きた もり お

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式 会社 新 潮 社

東京都新宿区矢来町七一(一六二)
電話 業務部 東京(〇三)二六六一五一
編集部 東京(〇三)二六六一五四一
振替 東京 四一八〇八番

印刷 株式会社 光邦
製本 大口製本株式会社

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

目次

酔いどれ船

白毛

こども

おたまじゃくし

黄いろい船

初出と収録

297 277 271 193 179 5

酔いどれ船・黄いろい船

酔いどれ船

目次

プロローグ 7

第一話 先祖の一人、三太郎の物語 11

第二話 或る一人の叔母の物語 25

第三話 また一人の叔母の物語 63

第四話 或る一人の叔父の物語 93

第五話 或る一人の若い女の物語 134

エピローグ 174

プロローグ

おれは岩礁の上に立つ。すっ裸で、かぐろい陽光にさらされて。

目の下の、ゆらめきもつれる水脈の濃淡。それは、ひとしきり黙し、さりげないうねりとなって近づくと、一瞬、岩に碎けて咆哮する。藍に溶けこむ純白の泡沫。水流は噓び、やがて、かそかな眩きへと戻る。

陽は矢のごとく降りそそぎ、褐色の岩は濡れしょぼたれてなまめく肌となり、潮の香がどぎつく四方にくすぶる。

微風の蠱惑、まっ昼間の海の媚薬。

おれは岩礁の上を伝う。青臭い体から塩水を滴らせつつ。

蝕まれた岩にかこまれ、ここに、ゆるやかに澄んだ水のたまりがある。外海のざわめきは遠く、ものうい沈黙のなかに静まる灰色の砂地を底にして。ときおり、その不動の砂がうごめく。砂をかぶった小さな貝がら、その中に棲む

醜い生きものが這いずりだす。

おれは覗きこむ、乳臭い魂をうつろにして。

おれの顔かたちが水面に映る。見すばらしい形骸、若さだけの肉のかげ。

海鳴りはすでにいずこかへ消え、孤り、おれはうずくまる。しんとなって、おのが鼓動に耳をかたむけながら。

だが、このわずかな海水のたまりに、あちこちの岩のくぼみに、ひそやかに生きる者たちがある。おれよりもふてぶてしく、うそ寒い意識として知らず。

海に棲む肉いろの星、柔らかな石ころ、はてはふしぎな触手をのばす軟体動物や腔腸動物ども。おれが静かになつて息をひそめると、そいつらは更めてのびをする。この海の産んだ臓腑、塩の異形の嬰兒たちが、吐息をつき、のたくり、ごそごそと埃に似た砂地をよろばいだす。情眠の極みのごとくゆるやかに、かつ、くらい深海の畏怖のように貪婪に。

水の面はこゆるぎもせず、このあくどき生と殺戮の讃歌を黙殺する。古く、気の遠くなるほど古く、醗酵しつくした海と時のまえに、なんの戦慄も要りはずまい。

とりどりの汚れ腐った、また彩り豊かな生きものども。

おまえらのまえで、おれはかぼそく獣の歌をうたう。おまえらに代って、低く、かすれた人間の声と言葉で。

千万尋の重たい遂み

ここに光もなく音もなく

どろりと淀んだ海の底に

星霜も知らずとぐろを巻き

籠ゆるがごとき漆黒を

噉い尽してこの遊星と

その子供らを見守るのは

老いた海蛇のわしなのだ

海蛇の色とてない鱗の上に、瘡となったフジツボや微生物、その分身がここに生き、うじうじと軀をゆるがせ、ずっしりと根をはり隠微な息をつく。彼らに獣の悩みはなく、彼らに、いんげんの羞恥もなく、とりどりの色合はあざけるように燃えたち、水のゆらぎ、そこに溶けこむ陽のひかりをむさぼるさまは、快樂そのものではないか。

おれはふと身じろぎし、荒々しく立上って、岩礁の上をふたたび伝う。すっ裸で、人間の痴と情をくすぶらせつつ、かぐろい陽の痛みだ。刺すような潮の匂いだ。

おれは心なき下等動物のかげのままで、なおも獣の歌をつぶやく。

古く淀む海の落し子たち

おまえらのゆえもない身ぶり

そのどろんこの営みから

おれは、いんげんの悲しみを痛いまでに思う

この蒼天と海のさ中に

いつしらず獣の香を求め

獣の肉に焦がれる

わが胸を焼く淫心

ひとすじの淫心

この鋼のごとき淫心はなにゆえであらうか

ああ、むなしく海があり蒼天がひろがり

そして今ここに

思念なく、声なく

ただひたすら淫心がある

おれは岩礁の上に突立つ。どすぐろい胸の思念を滴らせながら。

ふたたび潮騒のとどろきが耳によみがえってくる。それと共に、いくつかの記憶、おれの血脈の中に伝えられた聞き覚えの物語が、おれの脳細胞を、いや、おれの乳臭い胸の奥がをゆすぶりやまぬのだ。

声もなき海の落し子たち、おれはおまえらの同類だ。お

れの先祖は海に生き、涯しない大空の下大洋のさ中を流れながれて、遠い異国へも達したという。それはおれの先祖のいた村と家に伝わる、文書にも残っている記録なのだ。

おれの先祖が暮らしていたのはひなびた漁村だ。誰も彼もが海につながって生き、潮風を呼吸して育ち、波のうねりのように働き、やがて老いたり、遭難したりして死んでいった。海胆のように鋭い棘をもち、ごろりところがっていた男もいた。海星のように、たそがれと共に動きたし、獲物をからめ、くるみこんでしまう女もいた。海仙人掌のように、夜の帳にひとしきりの燐光を放つ腕達者な漁師もいた。かさかさに日焼けして、荒い冬風に肌も荒れ、あなたこなたの港々へ航海する船子もいた。

その中で、怖ろしい漂流の末、遙かに遠く海を流れて、地球の涯へまで消えていったのが、おれの先祖の一人。そこはメキシコという国だという。何人かの仲間が、幾年かのちに辛酸を経て生きて戻ってき、幕府の役人に事の顛末を伝えた。おれの先祖はついに戻らなかつた。大方、異国に残ったまま朽ち果てたのだろう。

昔のおれの一族は、やがて村一番の網元ともなった。なにかんずく、おれの祖父は明治の中ごろ故郷を捨て東京へ出、南洋一帯をのし歩く海商としてあどく富を積んだ。荒海育ちのその鱈は、文明開化の都会人よりも肥え太った。そ

れは海の生物どもの諳いと同じ剛き原理だ。

小暗い海の底、魚族たちはそれぞれ幾千万の、ときには億を越す卵を産む。孵った稚魚たちは、水の重みに堪えて浮遊し、大半が食われ、くたばり、わずかに成長したのもどもは、おのが流儀に獲物を追って鱗をきらめかす。

祖父は南洋の或る島では酋長同然であつたそうだ。沖繩人を集めて酒造りもやつたというが、海賊みたいな存在でもあつたのだろう。混血の子も残したらしいし、内地には肌白の妾が幾人もいた。彼は本妻の男の子には持船にならつて必ずその名に「丸」の字をつけ、妾の男の子たちには「渡」の一字をつけさせた。彼は豪放に海に生き、財を築いては散じた。

その頃から、かなりの歳月が流れたのだ。おれの祖父が死んで、はや半世紀以上が経つ。ふくれあがつた一族は、ある者はまともな業につき、ある者は零落し、ある者は学者として名を成した。いずれも祖父が鼻先でせせら笑う事柄であつたろう。彼自身はたとえてみれば大きな回遊魚であり、北洋を泳ぎまわる鮭の群れが、その最後に河を遡って産卵し、つめたく白い死骸となる天然の摂理以外の思想を持ち得なかつた。彼は海の生きもの同然に、無意識に生き、おおらかに交合し、数多の子供をこしらえ、老いさらばえて消えていった。

おれにはそれゆえ、いろんな親戚、数多くの叔父や叔母、従兄や従妹たちがいる。誰がどんなふうにつながっているのか戸惑うほどに複雑に、海の中に生きる原生動物から硬骨魚類までの多様さで。正直いって、おれには何が何やらわからない。

ある魚は珊瑚礁の洞穴に閉じこもり、一生を限られた範囲で過す。まるで移動性のない石灰の花、アミガイにも似て。一方、おどろくべき距離を泳いでゆく宿命に縛られた種属もいる。やむを得ぬ放浪の旅路をたどる魚だっていることだろう。人間であるおれの一族は、すべて魚介の同胞だ。

ともあれ、おれの先祖がおおむね広漠たる大洋に生き、その一人は遠い異国まで流れていったという血の香りは、おれの叔父、叔母たちに伝わっている。

その幾人かは故国を半ば捨てた漂泊者だ。狭い島国には住みかねる異端者たちだった。ゆえよしもない放浪の性、それがおれの一族の特徴だし、おれはそのことを誇りと思う。

岩礁の上を、つかのまの夢から目覚め、おれはいらだたしくあてどなく伝う。すっ裸で、かぐろい陽光にさらされて。

素足の裏を、ちくちくと荒い岩肌が刺す。鼓膜によみがえってきた海鳴りのとどろきと眩き。さんさんと降りしきる痛いまでの陽光の矢。

おれの生きる世界はやはりここだ。また想像もつかぬ海の底、海の涯だ。

おれの血脈は波さわぎ、ひとしきりの孤独と恍惚がおれの軀を包みこむ。

おれは褐色の岩に立ち、眼下にたゆたう水脈の色、どりを見つめ、そして、かぼそくしわがれたにんげんの歌をうたう。

おれの先祖の言い伝え、おれの同族の放浪者のごとき暮しぶりの陰影。それはまだ若いおれを突つき、乳臭いおれの心を根源までゆさぶる。それはあくまでも濃い空と海の彼方へとおれを誘い、かっとな胸を焼きつくしては溶け去ってゆくようだ。

おれは岩礁の上に、長いこと突っ立つ。ゆえよしもない気の昂りに身ぶるいしつづ。

かぐろい陽の痛みだ。刺すような潮の匂いだ……。

第一話 先祖の一人、三太郎の物語

天保十二年辛丑かのとうしの秋、摂州兵庫津の酒戸中村屋猪兵衛いのへなる者、所持の船千石積二十八反帆榮寿丸へ、船頭善助水主弥市等十三人乗組、酒、沙糖、綿、線香、塩等を装載し、奥州南部へ趣き、干鰯ほしいわしを買かむとして八月廿三日兵庫を開洋し、……十月六日六西風になり、船の補繕も整ひしかは、網代浦を出帆し、復浮津沖まで乗下りしに、風順よからくなりて、四五日の間沖合にゆられ居りたりしか、同十一日東風強く吹発り、網代沖まで吹返され、復追風に吹変りしかとも、此処ここにて船ふねかゝりせむと碇いかりを下せしに、此辺は海深く二房綱にぼうづな（二百尋）にせしかとも、猶海底に届かさりしかは、碇を巻あげ、帆を手打懸にして東の方へ吹流され居たりしに、翌十二日浮津浦近く吹寄られ、黄昏に総州大坊岬さかを東へ廻らむとせし折から、俄に乾風吹発り、波濤激揚し、其烈しき事奔馬の如く、船を飛す事宛も落葉の疾風に迅散するにひとしく、一瞬の間に颺放はうほうせられし事幾千里なるをしらす。舵かじを引あけ舷ふしに縛り、碇二頭を舳おしの左右へ二房綱にして、跡あとすさりにし、装載をはね棄、船足を輕め、

塗かをかすりなとして命かきりに働はたらきしかとも、殆おほしのきかねたりし。同十三日の夜二更頃より、颶風ぐふう猶また激烈こつりつしく号ごう雷らいの如く、狂瀾の瀆怒山嶽の頽潰たふさするか如し。左右の牆廻りは壽に破られ、外爐も砕けとひ、棚もさけ、用水桶までも飛散し……

（東航紀聞卷之一より）

夜目にも凄まじく逆浪が船を叩き、おしあげ、奈落の底へひきおろす。颶風は怒り猛る海と漆黒の空をどよもし、乗組員の叫びを打ち消した。

積荷を次々と海中に投げ捨てたが、船は波浪に翻弄されるまままったく航行の自由を失い、人々は船玉、伊勢大神宮、讃州金毘羅さむらいさまなどを、ひたすらに祈念するばかりであった。

最年長の老人弥市が、このうえは帆柱を伐るよりないと主張したが、船頭の善助は決めかねた。

善助は伊勢大神宮に心願をこめ、神鬨みくじを作り、一同に髻もどりを切らした末、最年少の三太郎に、

「おまえがいちばん若い。心を清め、みんなに代っておみくじをひいてくれ」

と言った。みくじは帆柱を切るほうへと出た。

そこで幾名かが代る代る、横波の打ちこむ中を、斧をふ

るって帆柱を切りにかかったが、動揺する船に足腰はよろけ、一竿入れては転び、立上れば倒れるという有様で、なかなか意のままにならぬ。帆柱はふつう両側から四分どおり切れば風のため倒れる。その際、風下はやや下のほうへ竿を入れるようにする。倒れる寸前に、帆柱の先端から船首にかけて張られてある箆緒を切る。さもないと、箆緒にひかれ、帆柱が船上に縦に倒れて船を損ずることがある。そういう知識も上の空のまま、夢中で竿をふるうち、だしぬけに帆柱は左手に激しく倒れた。船乗りの間には、左舷のほうへ帆柱が倒れるとき船は助かり、右舷に倒れれば命はないという諺がある。善助はこのことを思い、この危急の難破船の中にあつて、一抹の望みを保った。

船は碇二挺を舳の左右へ流しても、なおうねり猛つて奔流する大波のまま、海の咆哮のさ中にきしみつづけ、暗黒の冥府への道さながら、大きく揺さぶられながら怖ろしい速度で流されてゆく。

二十歳になったばかりで長い航海は初めての三太郎は、ここ数刻、命ぜられるままに荷を捨て塗をかきだしていたが、今は船底に打倒れ、闇雲に念仏を唱えながら、とめどなく震えていた。

かくして、涯しのない漂流が始まった。

風は次第に和らぎ、波濤も穏やかになったので、碇をひきあげた。帆柱がないこととて、代りに帆桁に小さな帆をあげ、乾の方へ戻ろうとしたが、四方とも見渡すかぎり海原ばかりうちつづき、島影もない。

かつ、しばしば風が変わった。北に流れ東に戻り、数日を漂っているうち、また激しい嵐となった。やぐら前面の引戸を破られ、大波がうちこんで焚火を打消され、船は半ば水船となり、転覆の怖れにおののくことも屢々であった。大風がようやく収まったとき、榮寿丸はいたく傷つき、九艇あった碇も次々と失つて残るは二挺のみとなった。波の穏やかな日には破損を直し、塗をくみとつたが、浸水はやむことがなかった。

もはや方位もわからず、一同は塗をとることを日課として、破船に身をゆだね、茫々たる大洋をただ漂よりよすべがなかった。

藍の空と海のつらなり。それは灰色の墓場への道と溶けあった。波風が静まるにつれ、狂乱の恐怖の代りに、もつと不気味な壁が一同をおしつづんだ。実体もない、手をはせば突きぬける、そのくせすぐとその穴を閉ざして生身におし寄せてくる胸苦しい壁。それは疲労、絶望、倦怠にも似た虚無そのものであった。なによりも、かすかな希みとして消えがちな、限られた船内と刻に閉鎖された牢獄とい

えた。

こうして、じりじりと堪えがたい時間が、日が週が、月が積っていったのだ。まず飢えと渴きが、一同を苛んだ。

遭難当時、米は五斗入りが一俵しかなかった。水も一人前に三升ほどしかない。一日一升の米を十三人で粥にして食べた。たちまち余すことわずかになり、幸い砂糖を三十六樽積んでいたのので、それを嘗め、水と酒とを加えて煮て飲んだりした。その砂糖もついつい一樽が七、八日にして尽きてしまう。

南海に出たのか、海も空もどぎつく色濃く、陽光は強烈で、ひとひらの雲も見えず、まったく雨がこない。

まず飲水が乏しくなった。海水を釜で煮立てると、出てくる泡が甘くなると言いたてる者があり、まずそれを試みたが、かえって塩辛く嘗めることすらできなかった。三太郎と同年齢の炊の勘太郎は、喉の乾きに堪えかね、潮水がぶがぶと飲んだため、急に衰弱がひどくなり、足腰が立たず寝こんでしまった。

善助や弥市たちは相談し、船乗りの間で言い伝えられているランビキを苦心して試作し、こしらえあげた。まず釜に海水を入れて煮たて、その上に、底に穴をあけて竹筒を立てた桶を乗せる。竹筒の上に冷却用の海水を入れた鍋を釣りさげる。すると竹筒からあがる湯気が冷たい鍋に当り

水滴となつて滴り、下の桶にたまるといふ蒸溜水の作り方である。

さんざん試みた末、ようやく一日に四、五升の水がとれるようになった。これを一同に割りあてて飲むことにしたが、待ち望んだ水が得られるようになった日、先に潮水がぶ飲みした勘太郎が、あまりといえは急なことに、ふいに痙攣を起して息をひきとった。

当然、水葬にするところであつたのを、それまでもしはば乗員の大半が氣力も衰え、どうせ生きて帰れぬ身なら、「一群れの乗組たちとわかるよう、縄で体をつなぎ合せ、首をくくつて死のうではないか」などと言いだす者もいたこととて、ここで勘太郎の屍体をたやすく海に捨てたならいっそう皆が力を落すだろうと船頭の善助は考え、自分の座敷の次の間の板敷の上に遺骸を安置した。

やがてその屍体は腐爛し、臭気を善助の居間に漂わせたが、彼はなおこれを捨てなかった。すでに大半が半病人のようになつた乗組員が、自分も死ねばあのように簡単に海に捨てられるであろうと案ずるのを考慮したからである。

臭気の堪えがたかった、そのただれた屍体の肉は、のちに南海の暑気に干し固まつた。目玉が腐つて溶け去り、眼窩のみをぼかりとうつろにして。

はじめ、一樽を七、八日くらいで嘗めていた砂糖も、み

んなが口々に、明日をも知れぬ身のなかなかに、取締りとはなにごとか、せめて心のままに与えてくれと言ひ立てるのを、善助は、もし陸地に近づいて精が尽きたなら臍はらをかんでも及ばぬだろうと種々にさととして、一樽を厳しく配分し、二週間ほども保たせるようにした。

ランビキに用いる薪もすぐ無くなった。帆柱の残木や、あちこちの船板をはがして薪とした。

このようにして行動力を失った廃船は、洋上をひたすら漂つてゆくばかりであった。

波風の穏やかな日は、熊野の海で鰹かつおを釣るに使う牛角を用い、いくらかの魚を釣った。一日、大魚に嚙かみ破られたのちは、船釘を斜めにして鳥毛を交えて釣針とした。鰯いわし、鰒はらこ、鰺いし、藻魚などがわずかに釣れ、あるときは二間余の大鰻うなぎが間近く浮んだのを、杈くわで突いた。これこそ天の賜わった獲物だと、力を尽してついに刺し殺した。その肉は桶に三杯あって、数日間の食糧となった。

しかし、魚の獲れる日は少なかった。漂流して日が経つにつれ、船底に鰻うなぎが多く付着しだした。海のおだやかな日には、まだ元気な者が綱で腰を縛り、海にもぐつてこれを取った。いくらかの酒と砂糖で煮て食べると、なんとも美味であった。鰻の船体につくことはその後もおびただしく、魚が獲れるのは稀であったから、このごく小さな、熊野方

言でセイという下等生物が、漂流中いちばんの動物性蛋白源となった。

とはいへ、飢えと渴きは、時と共にいや増す絶望感と相まって、乗員を日がな苛んだ。

すでに漂回すること二カ月に及んでいるが、帆影すら見えず、方位も知られず、帆柱とてない。

諦念というよりも、わけもない無力感や恥も外聞もないあがきが、人々の心を蝕みだした。故郷に残した妻子を思い悩む者もあれば、些細な欲につられて乗船した身の不運をあからさまに嘆きちらす者もある。また、わずかのことで喧嘩口論が絶えることなく交わされることもあった。

若いながらもつとも航海の経験のある善助は、このような状態を和らげようと、また極度の絶望にのめりこんで寝こむ者を励ますため、一同に念仏百万遍の行ぎやうを強いた。

今は人々は瘦せ衰え、ランビキのための潮を釣るにも労苦が甚だしい。わずかの蒸溜水も盗み飲みする者がいるため、困い水に鎖くわをつけねばならなかった。善助は毎朝垢離をとって神に祈るのをやめなかったが、他の者にもきびしく、

「朝夕、百万遍を繰った者には、きちんと水や砂糖を与えよう。それを怠る者には、その限りではない」と、かたくななまでの掟を言い渡した。